

ゲストスピーカー 遠藤知恵子さん(札幌遠友塾自主夜間中学前代表)の講話

- 「基礎教育の保障は、生存権・学習権の保障である」が大原則
- 「学び直しの間」を求めるニーズは高い。
 - ・夜間中学の存在を知ってからニーズが掘り起こされるケースも多い。
- 遠友塾の立ち上げ
 - ・1990年から3年間の学習会を経て、「とにかく一歩踏み出そう」で開設
 - ・維持のために多くの壁があった(学習内容、設置場所、支援スタッフ、運営費等)が、メンバーの協力により乗り越えてきた。
 - ・マスコミを活用した結果、開校時には100名の受講生が集まった。
 - ・運営費は、会費(当初1,500円→のち1,000円)、寄付、賛助金を充てている。
- 遠友塾の現在
 - ・各学年の他、「じっくりコース」を設置して、個別のニーズに対応している。
 - ・不登校の子どもについては、学校との連携・情報共有をしっかりと取っている。
 - ・公立夜間中学(札幌市立星友館中学校=2023年設置)とは、共存している。遠友塾の学習ボランティアが約40名支援に入っている。

グループワークから

<学び直しスペース(自主夜間中学)運営要項案をチェック>

<趣旨、名称について>

- ・「自主夜間中学」は硬いイメージがある。
- ・「学び」を提供することよりも「学びの間」を提供することが大事。
- ・「次」につなげる教育をする。スタッフが信頼してもらえることが最優先。「話を聞いてくれる先生」になること。
- ・学ぶ喜びを共有できる場。「居場所」としての役割も。
- ・学校教員への周知と理解を求めていく必要。
- ・まずやってみて、その中で問題解決していけばいい。
- ・通学のためのバス代の補助など、行政のバックアップがあればいい。

<開設場所について>

- ・社教センターは通いにくい。市内であれば中心部(古川市民センター、アウガ、県民福祉プラザなど)がいいのでは。

<開設時間帯について>

- ・仕事をしている外国人が通うとなると、「平日昼」の時間帯はどうなのか?
- ・不登校の子どもたちも、「平日昼」だと親が送ってこなければならず、仕事をもっていれば無理なのでは?
- ・平日の夜か、土日の開設としたらどうか?仕事をしている生徒も通いやすいし、運営又

スタッフも参加しやすい。

- ・開始時間を 13:30、あるいは夕方の 16:30～17:00 頃としたらどうか。

<スタッフについて>

- ・講師は、ボランティアとなると、退職教員や学生になるのか？
- ・障害のある方など、様々なニーズに対応できるスタッフを集められるか？
- ・信頼できる、安心できる場とするためには、スタッフの研修と人材育成が必須。
- ・スタッフのボランティア活動も高校や大学の単位になればいいのでは。
- ・スタッフは無給ボランティアの扱いでいいのか？

<学習内容について>

- ・時間割を組んでも、異なるニーズに対応できるのか？
- ・教えられる教科には限りがあるので、公立夜間中学と連携したらどうか。
- ・教科は最初はある程度しぼったほうがよい。
- ・昼休みは交流の時間にしたらどうか。
- ・遠友塾のような「じっくりコース」は必要。
- ・生徒同士で教え合うことも大切。
- ・オンラインを活用して、部屋から出るきっかけにしたい。
- ・家計簿のつけ方など生活能力に関することを教えることも必要では。
- ・「分かる！」を増やす学び。
- ・体を動かせる場所があればなおよし。
- ・外国籍の生徒のための日本語指導のスキルが必要。

<運営費について>

- ・資料代一人 500 円で大丈夫か？
- ・とりあえず 10 万円ほどあれば運営できるのではないか。
- ・コピー代は、お願いすれば無料になる業者もある。
- ・市民センターは団体登録すれば使用料の免除が可能。(Wi-Fi なし)
- ・協賛企業を募る。

<その他>

- ・昼食は、運営しているフリースペースが提供できます。